

令和 4 年 5 月 27 日現在

機関番号：17201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2021

課題番号：18K02629

研究課題名（和文）課題解決能力育成のための資質・能力ベースの家庭科カリキュラムと評価メソッドの開発

研究課題名（英文）Development of competency-based Home Economics curriculum and evaluation methods to develop problem-solving abilities

研究代表者

岡 陽子（OKA, YOKO）

佐賀大学・学校教育学研究科・教授

研究者番号：60390580

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：佐賀県と広島市の小学校家庭科担当教師への質問紙調査で明らかになった課題を踏まえ、学習者主体の総合的な「問い」からスタートする問題解決的なモデルカリキュラム及び資質・能力で捉える簡便な「資質・能力開発ポートフォリオ」（衣生活及び食生活）を開発した。協力校での授業後にその効果を検証した結果、本学習による児童の学びの質や認知の深まりが確認できた。それらを踏まえて、2020年から2年間、佐賀県内の複数の小学校において、開発教材を用いた調理と製作の授業実践を行い、授業改善につなげた。本研究結果については、書籍「生活の課題解決能力を育む指導と評価」の刊行とともに各種雑誌に掲載し、研究成果の普及を図った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

2017年告示学習指導要領小学校家庭科では、資質・能力ベースに舵を切ったものの、教育目標の認知過程のレベルが不明瞭という課題がある。本研究は、その課題解決の方途を探るとともに、学習者のメタ認知に焦点を当てて、授業実践を試みたところに学術的な新規性がある。

具体的には、週1～2時間の授業時数という小学校家庭科の特殊な事情に鑑み、必要に応じて各授業の見通しと振り返りを行い、題材全体の学びを一覧できる「資質・能力開発ポートフォリオ」を開発した。家庭科教育研究会と連携して理論と実践の融合型教材を用いた授業を実践したことは、家庭科研究の低調な学校現場の状況を切り拓き、学習者の学びの活性化に貢献できた。

研究成果の概要（英文）：Based on the issues revealed by the questionnaire survey of elementary school Home Economics teachers in Hiroshima City and Saga Prefecture, we designed a problem-solving model curriculum in which learners start learning with comprehensive "questions of their own". We have also developed the "Competency Development Portfolio" (learning contents of clothing and eating habits (for better lives)). Close review of the effects of some lessons implemented at our pilot schools proved that this learning had significantly improved the quality of students' learning and raised their awareness.

We are very happy to note that the lessons conducted at several elementary schools in Saga Prefecture in the last two years since 2020 based on our findings turned out to be quite successful in hitting the desired targets. In order to disseminate our findings, we have published them in several magazines, such as the book titled "Guidance and Evaluation for Developing Problem-Solving Abilities in Life".

研究分野：家庭科教育学

キーワード：課題解決能力 問題解決的な学習 家庭科 カリキュラム 評価メソッド 資質・能力開発ポートフォリオ

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究の学術的背景

2017年告示の学習指導要領では、教科等独自の「見方・考え方」の明示とともに、全教科等の目標・内容の示し方が構造化され、内容ベースから資質・能力ベースへと大きく舵が切られた。情報技術の加速度的変化やグローバル化の中、将来の予測が困難な時代に、変化への対応だけでなく、変化を乗り越え新たな価値を創造できる資質・能力の育成が求められており、そのための社会に開かれたカリキュラムと授業づくりは、我が国教育の最重要課題となっている。家庭科教育でも同様であり、少子高齢化という構造的課題を背景に、個々の主体が自立し成長し、他者と共に持続可能な市民社会をどのように創り上げていくのか、1人の家庭人や生活者、市民としての知恵が求められている現実がある。

例えば、ある夫婦が仕事や子育て、介護や家事をどう調和させ生活を営むのか、自然環境と利便性のどちらを優先するのかなど、生活の様々な場面で重み付けや意思決定問題等が存在する。これらの多様な他者や社会との関わりの課題を切り拓いていくには、豊かさの普遍的価値を追い求めながら、人間の生涯にわたる発達と衣食住等の生活の営みをダイナミックにとらえつつ、知識・技能を活用して生活の課題をよりよく解決する能力が必要であり、そのための教育の充実が求められる。これらの能力は一人一人が身に付けるべきものとして注目されるとともに（例えば：池田心豪著「ワーク・ライフ・バランスに関する社会学的研究とその課題」日本労働研究雑誌No.599 2010年）、その重要性は高まっているといえる。

本研究では、研究代表者が学習指導要領の作成と全国での周知活動に教科調査官として携わった経験から、学習指導要領告示後の今が、本研究に係る理論と実践をつなぎ、家庭科の課題解決能力を育む資質・能力ベースの授業づくりを活性化させる好機と捉えた。各地区の家庭科教育研究会との組織的な連携に基づく新学習指導要領の理念の具体化、題材全体を貫く「問い」を基盤にしたモデルカリキュラムの開発、簡便な評価方法の開発が急務と考えた。

(2) 研究課題の核心をなす学術的「問い」と学校現場の実態への対応

少子高齢化やAI技術の進展、ネット社会の加速度的な変化の中で、人間の生活は大きく変化することが予測される。しかし、今後の生活がどのように変化しようとも、それを主体的に受け止めよりよく解決できる力が家庭科の目指す資質・能力であり、その力の獲得のための方略はどこにあるのか、これが本研究の核心となる「問い」である。

一方「教員の仕事と意識に関する調査」（子安潤ら、2016）では、小学校で家庭科に力を入れて研究している教員は回答数（1482人）の0.6%と少なく、教科研究が進まない小学校家庭科の実態が浮き彫りとなった。この実態を踏まえつつ、家庭科に精通していない教員であってもその理論と方途を容易に理解できる資質・能力ベースのモデルカリキュラムと簡便な評価メソッドを開発し、家庭科教育研究会等と組織的に連携して実践化を図ることにより、生活の課題解決と新たな価値の創造につながる生活者の資質・能力の形成に影響を及ぼし、役割を果たしたいと考える。

2. 研究の目的

本研究は、生活の課題解決リテラシーを定着させる教育的課題の一環として、2017年告示学習指導要領による授業を牽引する資質・能力ベースの小学校家庭科のモデルカリキュラムと評価メソッドを開発することを目的とする。具体的には、総合的な「問い」からスタートする学習者主体の問題解決的なモデルカリキュラムと資質・能力ベースの簡便なポートフォリオ型シートの開発と検証を行い、関係教育研究会等と組織的に連携し広く学校現場に浸透を図る。

3. 研究の方法

(1) 課題解決能力を育む家庭科の資質・能力ベースの授業の理論的探究

2017年告示学習指導要領の小学校家庭科の内容の中から、5年～6年の2学年間にわたり繰り返しの学習があり、内容ベースの指導に陥りがちな衣生活と食生活の内容を取り上げ、これまでの研究成果（附属小中との共同研究、2015年～2017年）を土台に、資質・能力ベースの授業について次の理論研究を行った。

土台となる既存のワークシートの記述について、質的分析を実施した。

学習指導要領が改訂されたことにより生じる新たな課題の把握のため、佐賀県及び広島市において家庭科担当教員全数の質問紙調査を実施した。

と の結果に基づき、課題解決能力を育成するための資質・能力ベースの題材構成と授業の在り方について理論的に整理した。

(2) 「問い」からスタートする問題解決的なモデルカリキュラムの開発と試行

(1)の研究と並行して、これまでの研究成果を土台に、学習者主体の総合的な「問い」からスタートする問題解決的なモデルカリキュラム(衣生活及び食生活の内容)を開発し、協力校(附属小)で試行、効果を検証した。

(3) 資質・能力ベースの簡便なポートフォリオ型シートの開発と試行

(1)の研究と並行して、これまでの研究成果を土台に、「資質・能力開発ポートフォリオ」(衣生活・食生活の内容)を開発し、協力校(附属小)で試行、効果を検証した。

(4) 研究体制(研究代表者及び研究分担者、研究協力校・研究会等の具体的役割)

理論の構築に当たっては、研究代表者(岡)が全体を統括し、研究分担者は個々の専門性を生かして全員で取組み、議論して研究を深めた。

実践においては、これまでのつながりを生かし、研究協力校及び関係小学校家庭科教育研究会等と組織的連携を図り、情報を共有して、効果的な授業実践とその成果の普及を目指した。

学習者と指導者、研究者の協働的な取組みの中にこそ、現実的な成果が現われると捉えた。

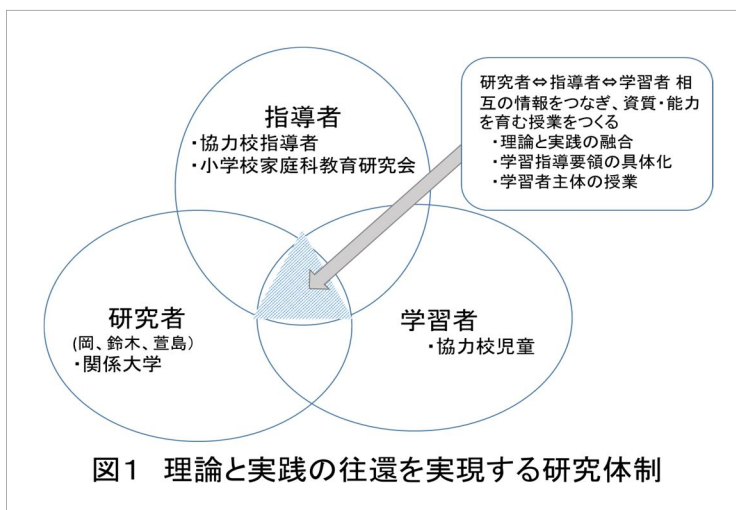


図1 理論と実践の往還を実現する研究体制

4. 研究成果

(1) 2018年度:「課題解決能力を育む家庭科の資質・能力ベースの理論的研究」と題して、戦後の学習指導要領と指導要録との関連について歴史的検証を行い、課題解決能力を育むための学習方略に言及した本研究の意義と歴史的課題を明確にした。具体的には、これまで歴史的に十分に消化されずに残されてきた家庭科の「生活の課題解決能力(思考力・判断力・表現力)」そのものについて熟考すること、問題解決的な学習過程と資質・能力育成との関係を明解にすること、更に「生活の課題解決能力」を育む学習方略を探究していくことが、学習指導要領の全面実施が進む現在の課題として浮き彫りになったといえる。

(2) 2018年度:佐賀県と広島市の小学校教育研究会家庭部会の協力を得て2地区の全小学校の家庭科担当教員に質問紙調査を実施し、本研究に係る指導上の課題を分析した。その結果、生活の課題解決能力育成に有効とされてきた問題解決的な学習を導入していると回答した教員の割合が6割前後と低く課題であること、また、調理及び製作の学習において調理や製作そのものが目的化している実態があり課題であることが明らかとなった(図1参照)。

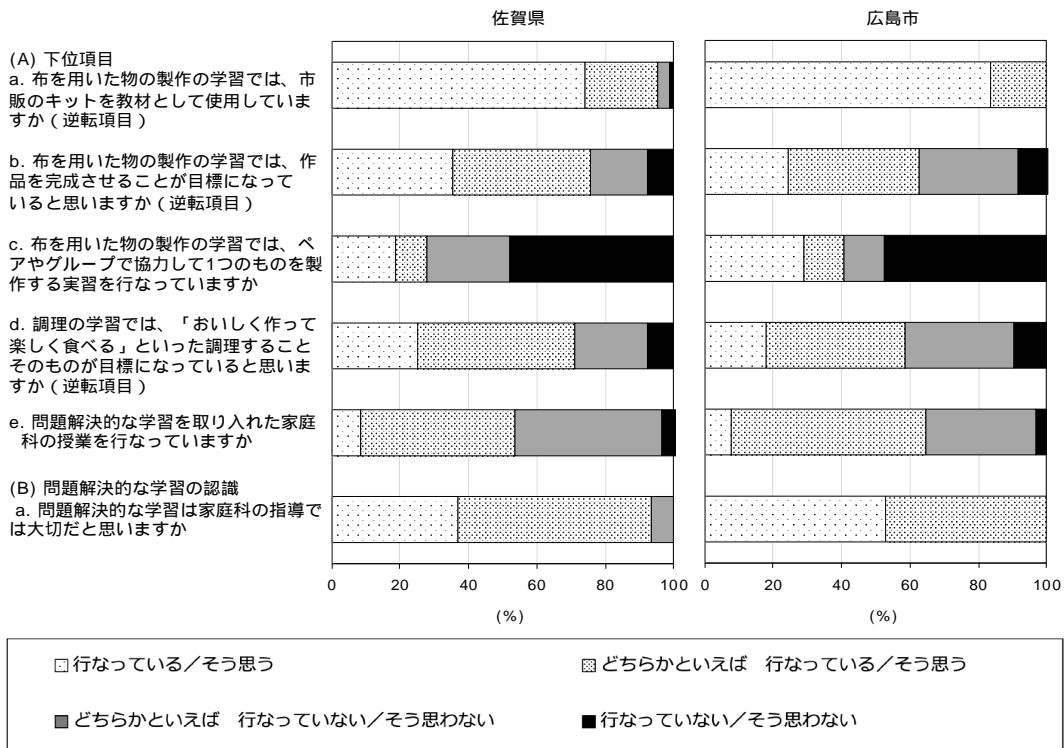


図1 下位項目及び問題解決的な学習の認識についての回答の分布*

*質問項目 33 項目において平均値の下位 5 項目 (A), 問題解決的な学習の認識に関する項目 (B) における回答分布を示す (佐賀県 n=155, 広島市 n=92, 93)

出典) 岡ら, 佐賀大学大学院学校教育学研究科紀要, 4 (2020) より作成

(3) 2018年度～2019年度: 質問紙調査で明らかになった学校現場の実態を踏まえ, 学習者主体の総合的な「問い」からスタートする問題解決的なモデルカリキュラム (衣生活及び食生活の内容) 及び資質・能力で捉える簡便な「資質・能力開発ポートフォリオ (調理及び製作)」を開発した (図2, 図3参照)。「資質・能力開発ポートフォリオ」は、授業時数が週に1～2時間程度と少ない家庭科の特徴を踏まえ、前時の学習を容易に想起し、学習者が全体として学習を見通し、1時間1時間をつないで振り返ることのできる評価メソッドとした。メタ認知の育成にも寄与できるワークシートである。

佐賀大学教育学部附属小学校での試行を踏まえて実施上の課題を洗い出し、佐賀県小学校教育研究会家庭部会の協力を得て新たな協力校を加え、調理と製作の授業で活用し、効果を検証した。

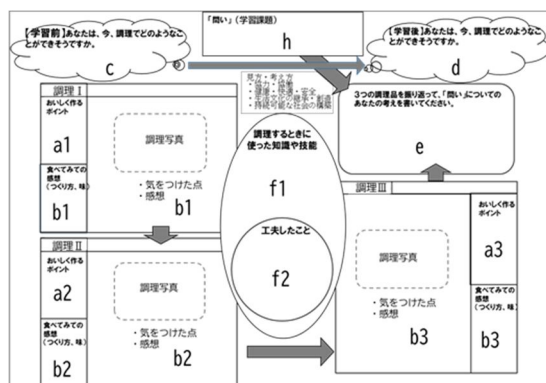


図2 資質・能力開発ポートフォリオ (調理)

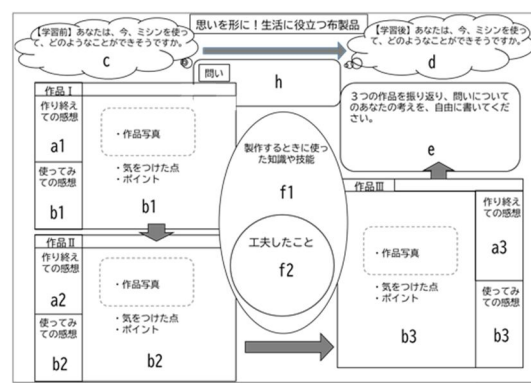


図3 資質・能力開発ポートフォリオ (製作)

出典) 岡陽子 (編著), 生活の課題解決能力を育む指導と評価, 東洋館出版社 (2020) より作成

その結果, 「資質・能力開発ポートフォリオ」を使って学習した児童の学びの状況や認知の深まりが確認され, 特に, 調理後の振り返りによって, 児童の記述は格段に豊かになっていることから, 完成させることが目的化している学校現場の指導の在り方を見直す必要を感じさせる結果となった。

- (4) 2020年度～2021年度：佐賀県小学校教育研究会家庭部会の協力を得て、2020年から2年間にわたり、県内の複数の小学校において、改良を加えた家庭科のモデルカリキュラムと「資質・能力開発ポートフォリオ」を用いた調理と製作の授業実践及び授業改善を行った。
その効果の検証を踏まえて報告資料を作成し、2021年10月には九州地区小学校家庭科教育研究大会佐賀大会において実践レベルの発表が行われた。資質・能力を育むための授業改善の一助となった。
- (5) 2020年度～2021年度：研究協力者との書籍編集委員会を継続的に開催して本研究の研究成果をまとめ、2021年10月に書籍「生活の課題解決能力を育む指導と評価-メタ認知活性化する『資質・能力開発ポートフォリオ』の提案-」を刊行し、研究成果の広報につないだ。
- (6) 研究期間全体：研究の節目ごとに研究成果をまとめて、佐賀大学大学院学校教育学研究科研究紀要や日本家庭科教育学会誌に論文を投稿し、掲載された。また、学会発表を行ったり、「初等教育資料」（文部科学省）はじめ各種雑誌等に研究成果を掲載したりするなど、研究成果の普及に努めた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 岡陽子、萱島知子、鈴木明子	4. 巻 64
2. 論文標題 メタ認知に着目した「資質・能力開発シート」の調理学習における有効性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本家庭科教育学会誌	6. 最初と最後の頁 3-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡陽子	4. 巻 8月号
2. 論文標題 課題解決能力育成のための資質・能力ベースの家庭科カリキュラムと評価メソッドの開発	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 初等教育資料	6. 最初と最後の頁 76-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡陽子	4. 巻 6
2. 論文標題 生活を学習対象とする家庭科の「学び」の考察：ニューマンの「真正の学び」に着目して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 佐賀大学大学院学校教育学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 129-139
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34551/00023191	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 坂下恵理、岡陽子	4. 巻 40
2. 論文標題 生徒の主体的な学びを作る家庭分野の実践研究：「個別の問い」に着目して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 佐賀大学教育実践研究	6. 最初と最後の頁 53-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34551/00023128	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 岡陽子	4. 巻 6
2. 論文標題 家庭科における「真正の学び」と授業づくり	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 学校教育	6. 最初と最後の頁 14-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡陽子	4. 巻 8月号
2. 論文標題 課題解決能力育成のための資質・能力ベースの家庭科カリキュラムと評価メソッドの開発	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 初等教育資料	6. 最初と最後の頁 76-79
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡陽子、萱島知子、鈴木明子	4. 巻 4
2. 論文標題 課題解決能力を育む家庭科の指導の現状と課題：佐賀県と広島市の小学校家庭科担当教員の指導状況の分析から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 佐賀大学大学院学校教育学研究科研究紀要	6. 最初と最後の頁 18-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山口美紀、岡陽子	4. 巻 38
2. 論文標題 生活の課題解決能力を育む個別の問いに着目した家庭分野の実践的研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 佐賀大学教育実践研究	6. 最初と最後の頁 31-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡陽子、三好智恵	4. 巻 2
2. 論文標題 メタ認知に着目した資質・能力型ポートフォリオの開発と有効性の検証 - 改訂版タキノミーを活用した家庭科学習者の記述分析から -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 佐賀大学大学院学校教育学研究科研究紀要	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岡陽子、萱島知子、鈴木明子	4. 巻 3
2. 論文標題 課題解決能力を育む家庭科の学習方略についての考察 - 学習指導要領の変遷と小学校家庭科担当教員の指導状況の分析から -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 佐賀大学大学院学校教育学研究科研究紀要	6. 最初と最後の頁 31 - 45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 萱島知子、鈴木明子、岡陽子
2. 発表標題 小学校家庭科の課題解決能力を育む指導の実態と課題 - 質問紙調査による食生活領域の課題 -
3. 学会等名 日本家庭科教育学会2018年度例会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岡陽子、鈴木明子、萱島知子、梶山曜子
2. 発表標題 小学校家庭科の課題解決能力を育む指導の実態と課題 - 調理および製作学習に着目して -
3. 学会等名 日本家庭科教育学会2019年度大会 (コロナ禍のため中止)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 岡陽子編著、鈴木明子、萱島知子、田中裕子、熊谷智佳子、三好智恵、前田寧々、江口佐智子、斉藤（旧姓 小宮）友香、岩永諒子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東洋館出版社	5. 総ページ数 222
3. 書名 家庭科 生活の課題解決能力を育む指導と評価-メタ認知を活性化する「資質・能力開発ポートフォリオ」の提案	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	鈴木 明子 (Suzuki Akiko) (90220582)	広島大学・人間社会科学研究科(教)・教授 (15401)	
研究分担者	萱島 知子 (Kayashima Tomoko) (90452599)	佐賀大学・教育学部・准教授 (17201)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	田中 裕子 (Tanaka Hiroko)		
研究協力者	熊谷 智佳子 (Kumagai Chikako)		
研究協力者	三好 智恵 (Miyoshi Tomoe)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	前田 寧々 (Maeda Nene)		
研究協力者	江口 佐智子 (Eguchi Sachiko)		
研究協力者	斉藤 友香 (Saito Yuka)		
研究協力者	岩永 諒子 (Iwanaga Ryoko)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関